

明治の肖像画

逍遙 鷗外 漱石

木村毅

恒文社

木村 毅(きむら き)

明治文化研究会会員
早稲田大学百年史編集委員
文学博士
元神戸松蔭女子学院大学教授



©1981

明治の肖像画

逍遙・鷗外・漱石 定価 1,900円

1981年5月31日 第1版第1刷発行

1982年1月30日 第1版第2刷発行

著者 木村 毅

発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町3-3

〒101 TEL03(291)7901

振替口座(東京)5-35824

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本

落丁、乱丁本はお取替え致します

ISBN 4-7704-0451-4 C0093

序

Pen portrait (文章で描いた肖像画) という字を見たことがある。

この書は明治の文人、もしくは文化の相貌のペン・ポートレートにはかならない。

私はこの十数年来、明治文学ないしはもっと広くいつて明治文化の研究に鋭敏な興味を感じてきた。

その結果は、論文や、隨筆や、考証や、講演、講義などの形式で、いろいろ発表して来た。

が、それではだんだん飽き足りなくなつて、もっと具体的に、もっととふくらとした肉づきを持つた形で、表現したい欲望をもつようになった。これは貧しいながらその成果である。

明治文化の幕は福沢先生に依つて手ぐられたといつていい。私はこの書中の『先駆者』によつて先生の片鱗を描いた。(今まで私は、先生のことを何篇かの小説に書いたことがあるが、この作はそのどれとも違ふのである)

それから明治文学の「晝の鐘をついた」といわれる坪内逍遙、逸早く本当の新しい小説の完成に成功しながら、ともすれば文壇の埒外に外れて行つた志士の夢想家の長谷川二葉亭、前後に類のない精到森嚴な頭腦をもつて創作評論兩方面に貢献した森鷗外、明治の「シュトゥルム・ウン

ト・ドラング」の驍将といわれた高山樗牛、広汎な視野に明治後半の安定期の社会相を微細に曲尽した夏目漱石。

これで明治文学の中央山脈はだいたい踏破済みである。

ただし、これらの諸文豪に対して、私がペン・ポットレートを作った時の態度は一樣でない。その時々々の気まぐれで、様々なスタンスを取った。

一番意地悪いスタンスを取って描いたのが『森鷗外』だが、しかしこれは私の鷗外博士に対する評価が低いことを証明するものでなくて、むしろその反対である。

ただ、世間でむやみに鷗外博士をもち上げるので、私はあの幽霊の美人を仮りて、博士が科学者の癖にひどく観念的な危気の多い、ハルトマン哲学などに「脱帽」されたことを多少揶揄したつもりだったのだ。

『坪内逍遙』は死の直後に書いたので、博士を恩師とする私としては、それを哀悼する感傷がこれを非常に浅俗な作品としてしまったのは止むを得ない。おまけに材料の吟味もこの作は一番できていない。一例をいえば博士が大学を落第されたことが何年か、博士の記憶と、研究家の推定とは違うのである。

これらは今に、博士伝の執筆中なる柳田泉君が根本資料を提供してくれるまで、しばらく訂正を待たざるを得ぬ。諸作はもちろん、小説として書いているのだが、しかし小説ということは嘘っぱちということではない。

伝記は、神の、もしくは天然の書いた小説だと思っている私は、それゆえになるべく史実の線

に沿わるる自分のイマジネーションを展開することを念として心掛けている。

したがって、小説とはいいい条、私が発見した新史料を提供している部分も少なくはない。二葉亭と乃木將軍の關係などは、この作が出るまで大抵の人が気づいていなかったことだろうし、あれほど研究の行き届いている漱石でも、それを早稲田に推薦したのが大西操山博士であったことは、今は知る人がほとんどなからう。

操山といえば、この至醇の哲人は、綱島梁川、幸徳秋水、徳富蘆花、木下尚江などと並んで、青年時代の私の心性を育ててくれた恩人だ。

ほかに尾崎紅葉、幸田露伴、北村透谷、樋口一葉、川上眉山、石川啄木などについても、私は創作したい衝動を感じて、明日、果したい宿題の中に数えている。

本書には、明治文学と關係のないものも数篇入っているが、これらはその背景としてあの時代の理解に何程か役立ちはしないかと思つて付け加えたのである。「百合葉のマダム」だけは平凡な私の半生を点彩するたった一つの浪漫的な経験で、この篇のみは徹頭徹尾実話である。

私は前に『福沢先生』と題した小説集を刊行した時、それに収められた十篇の作をインテリ大衆文学と自ら呼んでおいた。この書もやっぱりそうなので、いわば私のインテリ大衆文学第二集である。

木村 毅

目次

高山樗牛	5
森鷗外	27
夏目漱石	63
二葉亭四迷と乃木石林將軍	93
坪内逍遙	115
坪内逍遙(再び)	135
先驅者	153
バイロン	175
明治芸者・巴里遠征記	201
虚無党員の最期	231
芸者のジム公	263
「百合葉」のマダム	291

高山樗牛

——『わが袖の記』を巡りて——

わが隣室に少女あり、旅窓のつれづれを慰めむとて、われに水仙花を送れり。われ器に水さして朝夕これを養ひしが、幾ばくもならずして萎みき。

水仙花、水仙花、など凋みたる。わがこころさしの足らずてか。なが思ふことの残ればか。

——わが袖の記——

(一)

笑声を先立てて、廊下をバタバタと駆けてきた付添看護婦の町田お光は、曲り角の牡丹の間に飛びこむと、

「ああ、きまりが悪かった」

と、いきなり大仰に畳の上へ突っ伏した。そして猫のように円くした背を浪立てて、笑うのをまだ止めなかった。

「どうして」

室の主は多勢たせ一枝かずえという。二十ばかりの品のよい令嬢であったが、彼女は看護婦の慌しさを咎めるように、軽くその美しい眉をひそめた。

「だって」

と町田は、ようやく半身を起すと、笑いの根を断ち切ってしまうように、白衣に包んだ下腹のあたりを右手の握り拳でトンと叩いて、

「お嬢さん、わたし、こんなにおかしいことしたら、ごさいませんでしたよ」

「だからさ、どうして」

「あの松の間のお客さんね。あの方はこの小説をお書きになったご当人なんですってさ」

「え？」

「で、これはお返しになりましたの。これなら拝借するに及ばないって」

町田はこういって今まで左脇に抱えていた菊判の薄い本を一枝の前に戻した。表紙には市女笠いちめがさをきた中古の女性が、裾を掲げて月夜の草道を分けてゆく絵が書いてあり、開き口に近い位置に、書名は、縦に墨の色濃く崩した字体で、『滝口入道』と読まれた。

「では、あの方が樗牛ちぎゅうさんなの」

町田の報告には、さすがに一枝も一驚を吃した様子が、まん丸く見張って黒耀の珠かとみまごう双眸に輝いた。

「まあ！」

彼女の驚きはまだ止まないのだ。

「私ね」と町田は「あの方にお退屈でいらっしやいましょう。うちのお嬢さんからです。これご覧なさいませって、差出したんですよ。そうしたらどうでしょう。表紙を一目見ると、くすりとお笑いになっただけで手に取ろうともなさいませんのですよ。そしてね、おっしゃりようがこつてるじゃありませんか。

——これなら、まあ、ぼくには読んでみる必要はなさそうですね。

と、空うそぶくような恰好をなさいました」

一枝もこれには、乙女の類には似げない苦笑いを微かに浮べざるを得なかった。

「そういわれたって私ね、まだ、気が付かないでしょう。まさかご当人だとは、で、

——もうお読みになったのでございますか。

と、真正直に尋ねました。

そしたらしばらくご返事をなさいませんので、その様子から、てっきり私は、まだだたと判断しまして、

——それとも小説なんぞお嫌いではいらっしゃいますか。でもこれは読売新聞が金時計を賞に懸けて広く募ったうちから一つだけ選びだされたのだから、たいへんな名作だそうでございますよ、まあ、欺されたと思って、読んでご覧なさいませ。

と、お嬢さんから聞いているままを、請売りいたしましたのです。そしたら、

——お嬢さんは、この小説がお好きなのかね。

と、先方さまから逆襲してのお尋ねです。

——ええ、え。そりゃもう、三度も五度も読み返して、ところどころ、いい文章は、そらでもいえるぐらい丸覚えにしていらっしゃるのでございますよ。

そうしたら、これに対するあの方のご返事したら。

——そうか、そんならお嬢さんに、よくお礼を申し上げて下さい。この小説の作者はぼくなんだから。

と、いわれたので私、本当に恥ずかしくなってしまうましたわ、いろんなことをいわなきやよかったですその場に消えも入りたい思いました」

しかしこの時の一枝の耳は、もう、喋々として流るるがごとき町田の銚舌は弾いて、別な思いを追うているのであった。

「なるほど、あの方、高山さんというんだった。帳場てみてきた宿帳にも、確かに林次郎と書いてあった。ああ、私、それなのに、どうして今まで、気が付かなかったんだらう。毎日の様子から、並とは違った人だと思っていたが、そのはずだ、樗牛ちぎゅうさんなんだもの」

(二)

以上の一小景は、明治二十九年一月の初め、熱海の湯の宿、古屋の二階で起ったことなのである。

多勢一枝は横浜の大きな茶の貿易商の愛娘で、当時はまだ珍しい学校まで卒業したのだが、肺尖を痛めて二、三カ月前から、町田付添いてここに、病を養っているのであった。

すると去年も暮に押し詰まってから、一人の大学生が湯治に來た。病人を扱い馴れている町田は、その顔色を一目見ると、

「ああ、この方も胸がお悪いんですね」といった。

一体、病人という者はだれでも、人が病んだと聞くのを喜ぶ心の弱さを共通に持っている。

ことに長逗留の湯治の客などは、温泉にも景色にも飽き果てて、ただ一つの興味をひかれることといつては、客の出入以外にはない。いわんやそれが年末になると、引揚げる客ばかりで来る客はほとんどないのだから、後に取り残される者の心細さはこの上ない。あの人達はみんな、病気はよくなったのだろうかというやるせない羨望さえ起る。

一枝は、ことによつたらこの宿で、年越しをする客は自分ひとりだけかと悲観していた矢先きに思いもかけず出現した同病の彼だった。だからその大学生に、一枝は来た最初からある親しみと好意とを感ぜずにはいられなかった。

で、翌日から、顔を合わすと、目礼を交わすくらいにはなった。日あたりのいい庭の芝生に偶然双方から行き合はして、天気の良い挨拶に留まる簡単な言葉ながら、ともかくも口をきくようになるまでには、三日とも待たなかった。

だが、その学生が、自分の何より愛読する『瀧口入道』の作者樗牛であろうとは？

一枝は元来、小説など作る者は、自分達とは全く違った世界を高く飛んでいる鶴かなんぞのよな気がしていた。それはまさか自分達と言葉を交わす間近な場所へは降りて来る者とは、夢にも思つたことがなかった。

だが、その人が、わずか三つ四つ隔てたさきの間にいる。

一枝は、その室を訪ねてみようかと決心した。

本當をいえば、一枝は今までも、何遍かこの青年の室へ、話しに行きたいと思つたことがある。先方さえ構わなければ、自分の室へも来てもらいたかつた。

しかし彼は室の中では、極めて静かでコトリとの音もさせず、いるのやらないのやら分らないくらいだ、きつと勉強に余念がないのだろう。日なたぼっこをしたり、散歩に出たりして、眼に触れる時には、腕をこまぬいて、考えているか、ドイツ語の本を読み耽っている。

だからいくらこちらで親しみは感じて、実際には近づきようがないのであつた。

それに、彼が来宿してから四、五日すると、東京から同じ大学の友達が一人訪ねて来て、一緒に泊るようになった。

今まで、火の消えたように寂然としていた彼の松の間は、それから談論の絶え間がないくらいに、元氣な声が響いていた。お湯への往き帰りにその側を通るので、聞く気はなくても、言葉の端々が一枝の耳に留まる。

カントだ、ヘーゲルだ、ショーペンハウエルだとたびたびいつている。真理だ、絶対だ、信仰だというような言葉も繰り返される。

一枝は、そうした西洋の学者がどんな学説を唱えているのかも知らないし、それらの専門語がどんな内容を含むかもよく知らない。だが、ほんやり、それが何に関する話であるかは分る。

「この人達、きつと哲学の話をしてゐるんだわ」

と、そう彼女は思つた。

この哲学は、しかし、彼と自分との溝渠を、いよいよ大きなものと思わせた。

それに正月になると、宿はどの室も満員になった。

こんな時は、人の噂がうるさくて、若い娘が同じく、若い大学生の室なんぞに尋ねて行かれるものではない。

ことに、元日には、彼の室には新しく東京から三人の友達（作者註、大橋乙羽、笹川潔、熊谷直太）が尋ねて来て、その夜は旧曆十七日の月が、初島の上に出たのを幸い、都合五人で酒宴を開いていた。そしてそれからの二、三日、彼等は海に舟を浮べたり、十国峠へ登ったりしていたので、一枝はとうとう目札も交わす機会がなかった。

だが、彼が一人、もしくは友達と二人でいた時は、高尚な哲学の思索と談論で、とても近づけない気がしたが、五人でいる所を傍からそれとなく見ていると、ふざけたり、冗談をいったり角を取ったりしていて、普通の若者と変るところはない。

一枝は微笑して、これなら遠慮していることはないと思うようになったのだ。

それに三、四日が過ぎると、大抵の客は去って行ったし、松が取れると、そろそろ大学が始まるので、彼の室でも友達がみんな東京へ帰って、古屋はまさに台風一過、客としては去年の暮のとおり、彼と自分と二人だけが残された。

それで一枝は、もう躊躇していないで、自分の愛読書を、看護婦に持たして貸してやったのであったが、それが計らずも、あの、同宿の青年が、その小説の作者であることを発見する仲だちになったのであった。

(三)

晚餐が済んでから、勉強のお邪魔にならなければ、お話を伺いに、お室へ寄せて頂きたいと、看護婦をきかせにやると、どうぞ、お待ちします、という返事であった。

旧臘までは一枝は、手間がかからないのを喜んで、髪は自分で花月巻に結っていたのであったが、元日からは普通の娘並に島田に上げて、しかも昨日は髪結が来たばかりであった。

その午後、風呂を出ると、そのつもりで、宿のどてらは脱ぎ捨て、崩黄の地に梅の蕾を小紋に散らしたよそいきに着換えていたので、その返事を聞くと一枝は、鏡に向って鬢びんを直し、帯の恰好を見ただけで、すぐ彼の室へ尋ねることができた。

樗牛は、膝が冷えるのを毛布で包んで、木の火鉢を擁しながら、相変らずドイツ語の本をよんでいたが、彼女を見ると、

「やあ、よくいらっしました」

と、気軽に迎えてくれた。

「先程は、うちの看護婦さんが大変失礼しましたそうで」

色々考えていた挨拶などは、頭から消えてしまい、自然にまずこの言葉が出た。

「ああ、滝口入道の作者の一件ですか。アハハハ」

樗牛は愉快そうに笑った。